ンを思つと、かれの生涯の遠がではもどより、詩壇の注意をひいた期間も極めて短いといわればならなまでの十二年間に制作されていること、現存作品の大部分が元和四年から九年の五年間のものであること至立などに多少の異説を入れつる余地けあるが、その作品が元和元年(ハo六)から同十二年(ハーセ)での運由の一つに、長吉の韓サークルに在った期間の少なさをあげてもよいであろう。 く、靈甫特正の文集にもその名の見えないのは、なぜだろうか。

愛すること は、舞られたどい、舞 長売の 白王楼中の人」とは『方向』創刑号から書きはじめたわたしの李賀に関する記述の總顕だった,は極めて簡潔に、詩の解説を主とすること。「白王楼中の人」 1517.31 「白王楼中の人」 1517.31 、)自らの道を求めるに急だった人々だからである。(白田村の道を求めるに急だった人々だからである。 なしいい よい。世の人は、じかなる鬼す・天才でも、社会的につの名を世人に印象させる上に決定的であったろうが、 ŧ. 社会的に地位をえない場合の方が、またこの事件で 場合には 対合のに

伝記は極

自然 されたる自己の、空台巻 4 1952 9 24 人」とは「方向」創刊号から書きはじめたわたしの李賀に関する記述の總額だった。潔に、詩の解説を主とすること。

 $\langle \mathcal{T} \rangle$ H 洪荻 国の文学や絵画で注意を尊とび怪奇をいやし 17 松 奇米 した自然である。長ち、1トかっる自己の、空虚に迫ってくる自然。 む風があるのは **死を透して見られたろ自然。長吉によって詠ぜられた** なせか['] 孔子の怪力乱神を語らめこと

怪訝の怪奇と長吉の詩の怪奇との相違。「長吉ノートーかも左世怪談がよろこばれたか、この風智の心理的影響が。これをます考える。 か考ら落

775 されこんでいっち書き抜いた 抜し ただけの 1-かもしれ É 受の <u>ټ</u>7 群り の記で 地か出入 办 ゴしておく、 # 他に ま発力表 すま 7 うがよ 1 *(* • ك いような気もするがと思われるのは以上 グ 上 またどこ To

ansition L \emptyset * 他人 1 が失敗 租 先 5 先 恶 あ 7 液ルの 全く 持 *T*: 今 字 汚 ぎ ある D --[:, 注 II である なく、 「過淺駅 率ス 霰 t Epoque d 多 < ク 坦

Ħξ Х \bigcirc 詩人 || |人として規定することもできる。 ||人として規定することもできる。 ||本 | 132.5 ||7人として契管に着目したのではない。 ||本 | 132.5 ||7ルンチェー ・シ袋も鉄着名もな Cion IIIIった。 ¥() 一考之 文 ジルゴ だろう。 17: ルも のの こかの か 文章を対 読门 んた कुः 73 \(\sigma\) 17 李し 17 文

大其天韓韓田の伊州 趣解郎をみざ マ本 过と育自 回 高味に 根 家池 性 京 沙 + 1-出岭 社白 Ξ(: た小る歌 少明韓 もの手の手の 富は 计十 -d:, 11・1月再版) - ヨロッサー月再版) - ヨロッサー月再版) - ヨロッサートにと、ビザ、韓の難然、が、韓の難然、対し手、韓の難然、対しが、韓の難然、 に然り間では **上**戲村 面に 文際 、白の一(詩略 ことも 知 の平易、対である。 あ 1) 17 かし 左 雄 Ţ (7) 大大小 MT 詴 桂白の 全大ウとは 勜 西

* -- +-T 三年 9 柳米岩

< 家上 ナし るぞ 00 タ現 すろ 17 怖 なる 在 波等の がで情が見る。 タアであることが有 1 が事に皮等に大味を示され ホクを集め、縁故間久雄・ガ 手に皮等の特色が下塚を示さないこと、 ニンれら 緣故者 Z 研 ナンと 扣 遊
尼 00 行 かなる 0 4 指 色信人 天戏 **育**名 行がが、 的 1) きるに まで訪わっとに明治 まで 秋 定し将 で も 1F にならつとするもに家の有名でない 知 ってい 来の (学の 残ちクマ ドン 方作 苦 = 家ンな

「略する。 ・ 本の主にので、蛇足を加えた。 ・ 大ので、原国人・同時代人にわかりたった慣習が、異国・異時の人にもっともわかりてく、、三をにあるが、同国人・同時代人にわかりたった慣習が、異国・異時の人にもっともわかりてく、文芸雑誌のかなりであるが、同国人・同時代人にわかりたった慣習が、異国・異時の世界の挑源郷的状態に対する論嘆のではかができったのか。なお「六月号」を五月に書きぬいているのはまちがいではなく、文芸雑誌のかなりつとが発行日付より約一月以前に店頭に出るからである。これは現在も同様だから註する必要のないこをとが発行日付より約一月以前に店頭に出るからである。これは現在も同様だから註するとでは、日本のからはあります。 ・ 本の主にはいるので、変異について書きはじめようとしていたころなので、量の進めかたについての自戒のつもりだったか。あるいは、いわける大家・名家にていたころなので、量の進めかたについての自戒のつもりだったか。あるいは、いわける大家・名家にていたころなので、量の進めかたについての自戒のつもりだったか。あるいは、いわける大家・名家にていたころなので、量の進めが、についての自戒のつもりだったか。あるいは、いわける大家・名家にていたころなので、単の進めが、についての自戒のつもりだったか。あるいは、いちによるないでは、いている。

人 と伝 E * 1957.7.15.

MEDITS All we can hope to do, in the attempt to introduce some order into our preferences, is to clarify our reasons hen I say criticism, I mean of course in this place the commentation and exposition of works of art by of written words

for finding pleasure in the poetry that we like be the real thing. Even the most accomplished of critics can in the end, only point to the poetry which seems to him

対してったの考えかたが、し、むかが に、 はいでは、 はいでは、 はいでは、 はいでは、 はいでは、 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないでは、 ないでない。 でんだいのでないがらい。

類総 作平原岩 有酒錐澆趙州 土 得非 黄金銭范蠡之邪 9F) 馩 元慶 夷白

こに再録して かいらに詩が無かったのではなかろうことは拙稿「陸游の李覺評」(本誌第八号)「知られるかの周必大『二老堂詩話に夢立方『韻語陽秋』巻三、葉少蘊『石林詩話』から三条引いている。し李翔皇甫没無*

どものは迷信としかいいようがない。誰によって賀のその俑を互すのかもしれめ。陸の文は、しかし、とも、こついつ愚劣互文章が詩話類にときどき出てくる。河、追知馨夜促、受覚後生多、王四十九而平、語意不李長吉云、我当二十不得意、一心愁謝如枯願、至二十李長吉云、我当二十不得意、一心愁謝如枯願、至二十 2無対* 1952.9.10. さいよって賀の進路をふさいだ宦官宮妄の論理と同尊のものだ。 、しかし、どもかく賀の詩の本質にふわるどころがあるが、亜、どき出てくる。李賈に関しては陸龜蒙「書李賀小伝後」あたり九而卆、語意不祥如此、豈神明者先授之邪 韻語陽秋 巻二。即枯廢、至二十七而卒、陳無已除夜詩云、七十已强半、所余能即枯廢、至二十七而卒、陳無已除夜詩云、七十已强半、所余能

句話歌 を奇絶 無対としたとき。人、はすぐれた批評家だっ たが、 多卿の 句にあって吐いたことはで

天岩盲情

天亦者、人以爲奇纶無対

曼卿対

月加

無恨月長円

人以為

勃飯

宋

10-045

許

話

流調車是桐人 以尽知其味 人之語矣、 入之語矣、 * 非可加陷以 辺得峰 味下僧兵鋒 馬敲筒起来 読恐気月森以 其未加下画是 集心虹門戟得 此于是是清三 三美得 一 云名 **為然画**於深 非性各朝以前僻人邪是 数耽詩南得 耳 公 住 集 河 、 平 先 張達 可、平、生枯為 は語平珠火以之 死 不豈山東微。 韻休皆雨風雪逐 藷 加 吹淡至 陽則此王又河 秋是句勃生漢闡 凡哉以 M 是白疎馳 卷子 四美古得居雨、 图

耋武以詩 晋 細 人字 森 森 府 校空節 東南二字是官監之名 東京の「韓元」 東京の「東京の「東京」 東京の「韓元」 東京の「東京」 東京の「 無云 みたところ · 酒 · 、酒 爾 · 、酒 爾 · 、酒 爾 · 、酒 高 區 巻二にこの 宗泉序詩 楽 · ウ烈 唐上章 発解サ其太之ス 大類 之白回矣 百禹出其長禹失 条が見当ら 街秘門詳吉克伝 本行 知官 而鄭之 而 葢因 ないようだ。巻数が 不而釗樵 無干 自襲為作漢辞 あや

主 x TE * 70 李隆亦等夏の一詩且二四尾逝集か随話置 杜十消波闡集九愁、歌 一世八四年 1952 一族之合 $\overline{+}$ 滑殘 舒왫 位曲 甁 水肠 商商 詩框 集伊 清苍夜 光隔 精磷 十音 年飛 刑框 重 少 即 FG 屈 雨

乖一

×癖 名 五 + 啼自 年露 有 公債 顧系 7 長絶 かるに近週 =+ 霉 またかれて 青行 生領 長别 古採 景好がなる。 葉律 蕉 符声 とは 天上 宮楼 禁中 微蓄作 Ø 蜀の 問 蓝 場

きる 可久 とでもハ わ六 の学 賀位 人々に知ら 7 いたことをつぎ Ò ≰‡ 諸に 文 で 刊 るこ

源征 别如 浩 风掣 作小 於溷 $\overline{\Pi}$ 李 贺 天 个旨伝 峦 好香 F 語 愛如 Ш 鋳 芸 鉄 作 電 四 而寄 同鉄作 死劉 掀 詩衢 **オ**く 意 意 不 詩 斎 ÍΑ 詩 管 第 之 成 存 が 核 奇集 無 南而微 飲ご 句 不妥、 何如死 不張 籍託 ゴ 無一 m 躛 使得る 字無亦歴. 死仏山 滌 沈晨版 是東 熊 明仙终 が長 李諒交 一言王经 有阿 浸渍 孪

* 外開 沟 * 52.9

二家

*

1952

* 云 酒 表表派に自 す 月朔日下 マ 一天子へ 国地人は 夜酒 醴酒を献る 朝入 リと ・来る、 云 事 1-j ま 之 見 り に 則 Šī フ 因甘 < て酒れ 酸のば 暖を事型 時以なり 供 サるセ 大皇に献ずることを表記に申り 夜を 云 经 雲錦 往右よれたる竹 雜 天皇十 H. 様の 1) 祭九 酒 には多十分なり 月戊 18 (八酒) 用朔 言 申 力

物不 光能 冬钱野 寒起間 故 挪 寒 州 短俱 詩 集憂言 附酷和従 কুন 所而 引秋近者而 乎 īE 1得 **首**陶其 春日遅 也靖性 節 白以所 居 信可棄也、知此信易以和易享遐悠,至於王昌齡、八一、楚騷之幽怨、 It 懿 可 王少 与長維 彦言吉 之 · 詩 以 孟 矣 院 洗 洗 然 而 ス 海致高 李 安 折 調 元 निय

詩和応

張長 元 中 人 自序其 読字長 誐 拆. 剧 可 仄

本、東阿王紀夢行、軟杳既工、直及易東面、倒乱之一 黃滄浪云,玉川之怪心空舍,曼膺款ध取自容尽势州士,二十八宿羇心疾势州士,二十八宿羇心 香本 當不石

肢 擱 吾折寒桂従 λ 解旨 不 野型 思報音 世 レス 包 土花 翁 **心** 著 酒 衰漏 催 宛 加画水随 小忽咽 說索王拈 中營蟾出 古淺 殿閣衛 娘皆 荒 園花髮 陪薄 紅猝不徵 妆鎏勝也 女步梳 魁秋 ŦĖ 冷 **感与** 気麒桂 弄 逼麟露 背上石 四 挑 、燈視之、 文 裂紅 傚 虬龍雲 毛髮 E 4 怬 至 下深如

× だろう。 7 9 治に |-とある Ę か何 ろ気 れとなけ 味 もひ詩な よ可しっての ない どいしわ はたからない。 したからない。 ないかからない。 は時とい いの自ふ 長称リ 劈するに 7 をしるだ 1 ーネンので 氏の人の嫌い が味には 辞っけこ のたおひ 保らかひ 守 ŤŢ によ 腹穴 立だけ

李賀 詩

113 胜李 上白* 美歌字 諷篇質 疕 抹陳 太陶 市频5 郎睦 尋 禅相 月似 大 師須 の知 生代 涯不 と対験 新人 Þή 31 休 後 唯 修 而 矣 縻 西 推 揽

詩 * 上 刺 * 111

鬼

烈五哉 硝十 は米技篇 国 を聊墳動亦朝 文 常一流、≠3%為詩者? ※為詩者? 有 下营少 筆張 為独則 不作李風 在詩太刺 洞図白 房五為 蛾唇称荀 個 不 神以 熊 **神仙就怪之間、** 三気骨高拳、 こえるででする。 これのでする。 これのでする。 これのでする。 これのでする。 これのでする。 これのでする。 これのでする。 これのでする。 にれるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのでする。 にはいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいる。 にはいるのではいる。 にはいるのでは、 にはいる。 にはいるのではいる。 にはいるのではいる。 にはいる。 にはい。 にはいる。 にはい。 にはいる。 にはい。 にはい。 にはい。 にはいる。 にはい。 にはい。 にはい。 にはい。 にはい。 にはいる。 にはいる。 大 則教不 擲化失美 主頌 美酒 不風土 銆利木 至後李 道 不 長厥於 吉後血 以白気 降聚 天何 皆諷所 以諏尚

うの填へ 意门姑私 と一秋飛 るを懸斎 な唱が声唱 元当一棚題 ずっ 皋のけ洋る 記で絲山 ていあの人 る如の 段柯古に対して希臘神話のない詩を最も好る。 故に応み 第二人に人 今 **爱詩間で** 読けのも 出王語 求求漁多誦 で洋作田 うなる のす来 Ž るの の星ふ た集なれ 311 K そのれ中 7. (Z) 腰 妄 ŧ 《くを気する 中に 見 え 王 言るは) 秋

読

Ö 17 大作と 方り 李朝 五をいる。 てのった 気な学は にと は けば小元 沄 へてあるのだらう。その一例とすることは見に言ふ如く、上帝 つ。 周作人 聚堂語録 悪ることが出来よつ。――金夾のことが出来よう。――金夾」上帝が白王楼を修めて成るすんであって、ただちょっと 金銮の表示 4 翁口 77 松枝茂夫訳 結縁1まだ土木であるが、長吉に賴んで来て貰 鏔

李八 体詩 5 w . -

外房李八 詩 算 原 所謂王河西部門 部拱 体子 · 茅 乗 駐 詩 夾不 七言律詩又次、安宗有一種風致、安宗有一種風致、 而 胸 次不凡 自能脫 俗、 亦 注住

洒 巻 亦 詩 排 兵 山高古 巖為 擅長 次定药亦 五条言 奇 古短 詩章 僅往 往 篇欲 出 **芒**新 ŕЛ 可及 近失

亦惟 不以所 ·可一世之才 『安遺集一巻 『安遺集一巻 一世之才 其詩歌行、見が一元陳泰揆 居十之七八、抵係、兼与欧陽元、 他出入於李白李寶之間、同学於鄉、 莫天馬賦

雖今 較 栾 大過 首

後

元

傷蹐

粗糖

権仕

而而

神经

鋒 7:

凌

或

当 惟 **清谷** 英格 绿 亭 之 集 筠 山 者 様 体人 二巻 老老铁绿 之卿 删元 習 撰 汰 呉 呉景 1言古詩教 多条以空声多条以空声 舌 **吃為當** 亦耳 要要孤 七言古 古日 体問 如 其 似 李賀、 為 人 惟 近 歌 体 行 亦 爽 Ē 時 雜 自喜 李

怪 說八 護远則十汪有 余首 **其** 八平生 七言 造語 新夢坊: 朱子、 73 近 温本 一庭阿 P等質、 日意於文章、 然其 文 持 綸 迁

コト

晋人*山/高 ト云云、漁隠叢話ニモ全首で載せ、李賀ガ詩ニ出ツト。ソノ後全虐詩テ曲舞ニ、カウクワンモトヒヲ切 養 計二 リーズルド標ー 二烷 ス F - 八沉香檀香 / つ字長吉が美人控へトニコトアリ 梳 卜頭问 云詩 勻 面 疮 取 香藤ル 夢ル コ帳

恒一世 越堕 一一云堕馬之余形也卜。 レヲ アヤマリ デモ 本 ・国・サケカミハ、後漢ノ堕馬髻ィ慶風ト云マコト、トロヲキッテ半タンニ枕ストイへり。堕髻ト云ハ ヤ世の が古今 (東海) 東京では、東京である。

中 X にどり 東遅ば 告 戻っています。 ないれ と 七世紀 舞曲を俗曲といったが、れていることは、注意し紀から十八世紀にかけて あるいは謡曲のこどであろうか)でよい。「晋山氏」がどんな人かしらない人である。その時代に、誤ってでけあ ハ人です UM 李賀の 詩 一つ愛読芸

*

雪 177 木煩 7 今 · 益 | 上 艾 七命二日 0 徐興公 言に酒をささと云。 ど 捞 海 云 豫北之竹葉 得门 **岩八竹皮ナリ** 上 泉、註ニ酒之名也トラコ。饕老の雅劇に、 吾国 古八文送一熟セシュへ、ト云、又唐、李賀が詩ハ、もたいのちくえふと云、 - 云・又魯・李々もたいのちくさ 俗好猩 位二モゴ 償シュケデ多ク字面| 17 ヲの グルトミへが猶ねる。 ミヘタリ。 酒文芸

カナの使い わけ がお かい いか。 [] ま 捞 海 得 が手許に なし Ó ₹. そのままに して 、おく。

1 |競しなべにすべ

有意無義間 * かく李長吉 1953. 6. 26. まじき夢寝ることに見る 吉井 薱 短歌 研究昭 和28年2月号

意間、 世說新類 內子嵩作意賦成、 語 従子文 康、 **参**五 文 学見。 問 若有蔑邪 非賦之所尽、 岩無意邪 復何 所 规 正在 有

7.6 ▼ をめぐってー 李長吉體

大教授小 酒教 の「同請公登慈界寺塔」 |二||では二三の感想を記す。||氏の論文に新見し書します。 などの影響でに成

るもの (Das Heilige)」としての太宗に対 する。 悲 # 頌 歌 ۷ かめ が氏の 結論 0 よう

鈴つの成宗あ なけ区人木は感立でる貿 人物に当てはめる必要はない〉とする……太宗李世民を比定する以外考之ようたっている、どわたしは感じる。そ想の出発臭においてのことであって、想の出発臭においてのことであって、然短歌山で、後者の泰王が唐の太宗で続短歌山で、後者の泰王が唐の太宗で 考之よ

違れはでと ため しじの 刺 つも太 見らかせ るわえめ

も塊ン穴 だいがきへいる。 よびもろもろの家馬衆畜の亦た仏の力をもっての故に神力の彼をして見るを得し、いま一切の人はいかにし マイがごとして、家生の力に東方の恆河沙笠 いま仏の た『大智度論』の文をその仕事のこれら二詩は、「そ類に対応する。その描く々舞に対応する。その描く々 ま仏の神力の世 譬えば転輸でいるなり。 のらざるなり。 があれ、家生があれ、家生があれ、家生の飛行が、たどいので マの前に 生行阿答にはある 後崩

安れ得るし外 て望ま服方 、経つ天を 人ないをるかける。 ごとの無得した。 なまりた っまてた 册 の劫昧 故尽の 切るた衆時が 7 切1 なば 遠自 ₹ く然得 見に

仏士 穏口し 羅 で京 あきって = 劫尽の人 後ので どことでなく、 ŧ 対、焼わ 時が 0

王放の焼李 ど逸狂時賀 7 置ろい思力って フウいいをて フる」へ法華経如忠いわけだが、「常に我へいわけだが、それにいついたといえないといれないと、世俗の王なるだいと、世俗の王なるだいと、世俗の王なるだいと、世俗の王なるだいと、世俗の王なるだいというのと同じで 来仏にく転寿一つは輪 で見るで ブな聖くい王 類を長行形 倒も夜れ行 うのなに 0 凡て宴らた 夫の の故 泰え 王て ī ーしい て あ橋一のる っ恣酒威か ての耐力ら =心喝に 聖を月よ な生使っ な生使 ってか 倒 653

のれたし と注が一て 七読 まだ出 てた \bigcirc だは にわ 次四文 751 っか でも がは \bigcirc 楞じ魚 伽な 経しい 弋 \bigcirc 机のは

でN相脇世はにそ法な五 追轉換 の天卐観 性する危機ながとにかられた しのぎ 大智要論 、「大智要論」 仏一観放眼卷 いと品世察ていの尊 鼰本 切 クと如無如請忌な てラ夜来量師仏むいわ よイ叉見光子品かよた いマ王仏明王第もつし にしたは クー生加奮ス楞於空辺 で加須中視の ・ 経弥虹眄一と 七世雑相、 節こ 巻俗記対如呵がろ 本権 | 楞日呵あ 一加千大る の一山光笑 作学リ質 頂 上加頂 出流 却上 す究呵尽肉 呵瞒 別と真に 大大 九 放 侃

のに

楞 710 一二に大きな価値の逆転がなされたのだと見な

「大古今平にかえると、その劫尽は第三句の観りによって成就するのであるう。」を満足によって成就するのでなく、秦王の騎完逆によって成就するのであるう。 「成武におこって成就するのであるか。」を流してやっている。 「成武におこって成就するのであるう。」を流してやっている。 を流してやっている。 か言ではないであるがあるがあるがあるがあるがである。 が表記におこって、一般であるがあるがあるがある。 が表記におこって、一般であるがあるがあるがあるがある。 のであるのであるがあるがあるがあるがあるがあるがある。 れは暗殺者だ。それならこの家ったく王者らしくない。第二句の

によって起ころことがわかろ。

虎遊を許している八極・碧天

千年紙をあおるが、

従いわ この一文は、 紹介でも批判でもなく、読後の泡沫的感想にすぎない。「また氏の、悲しき頌歌》も、わたしのほうでよく理解していないかもしればんでいない。わたしの使った聖・俗は常識的な使い方をしているので、たが、聖「俗」の機念はエリアーデの、Das Heilige und das Profane、に従つようだが一篇の趣旨ではないであろうか

賀 文 献 目 餯 稿

84 83 82 81 80 十十二月 李壽李賀評長 員小論 – 比奥の名符:鈴木虎雄注記時:鈴木虎雄注記が上 - 刘遠生記中 の手法を中心として一注釈「李長吉歌詩集」に川環衛(世界名著大事中川環衛)世界名著大事中生)広東人民出版社 - 専の 典の項目一定次文章 模山 · 伊勢男 高稿念 年六月 七 九六一 中国文学研究 漢文教室 五 李賀二五 九六一年 夢天」に 五六号 関 する記述がある。 李賀全詩の訳注である。 九六二 二年

東京大学

军

非情の燭樹